

【関西ならではのコラボレーションが未来を創る】

私自身が当事者である大学生目線で、関西ならではの地方創生に関する方策を考察した。

その際にキーワードとなるのが、コラボレーション（以下、コラボ）である。では、具体的にどのようなコラボが地方創生に必要であるのか、三点提言する。

(1) アカデミズム×ローカル

大学生は入学時点で専攻を持つ。言わば、4年間の学問生活をどう過ごすのかを決断する。この際に文系か理系かの選択を迫られる。私はこの分類による文理間の学問的乖離に強い問題意識を抱いている。本来、学問は文理の区別なしに分野横断的に体系化されるべきである。文理を超えた相互交流こそが既成概念に捉われないイノベーションの源泉になる。私自身も実際に、京都大学で月 2 回開催されている文理を超えた座談会「アカデミック座談会」に招待され出席する中で文理融合の必要性を強く感じた。

まずは大学単位で文理の学生が対話できるプラットフォームを構築する。そして、大学が属する地域が抱える課題を議題として、集合知を還元する。この仕組みが確立すれば、学生が当事者意識をもって主体的に地域が抱える問題と向き合う環境が醸成される。環境の整備は、長期的な関与を必要とする地方創生の観点からみても重要な点である。

関西は全国的に見ても大学が数多く存在する学術都市であり、大学生が日本各地から集まる。この状況は、文理を超えた大学生同士のコラボ、並びにローカルな地方自治体や地域組織とのコラボに最適である。

(2) グローバル×ツーリズム

観光資源の距離が近い点は関西の特徴なのである。2020年の東京オリンピック開催が迫る中、訪日外国人客数は年々増加傾向にある。特に、東南アジアからの旅行客数の増幅が著しい。グローバル化は自然と進行し、海外との接点はどんどん増えてゆく。

以上の状況を大学生、特に留学生とコラボさせることで新たなうねりが生まれる。具体的には、日本人大学生と留学生が観光資源を通してコラボする機会を創出する。私自身も大学一年生のときに、「京田辺サミット」と題して留学生と大学生、さらには地元の住民の方が交流できる機会を生み出した。日本への関心が高い留学生は、常に母国と日本を比較し客観的な視点を与えてくれる貴重な存在である。彼らは大学が所在する地理的な場所への興味やこだわりもあり、留学先を選択した。これらの点を考慮し、留学生とコラボすることで自分たちの置かれた立場を再考することができる。また、関西に特徴的な観光資源の近接性を生かして大学を超えた交流も促すことが他地域と比べて容易である。まずは留学生に関西の良さを実感してもらうことで、彼らがインフルエンサーとして母国に帰った後も関西の魅力を発信する存在になることが期待される。

### (3) ソーシャル×ユーモラス

関西が持つ最大の特徴がお笑い文化である。日常会話でも常にオチを要求され、ユーモアが人物評価に際して大きなウェイトを占める点は関西ならではの事情である。時代をさかのぼれば、商人の町として上方落語が栄え、今現在でも全国区で活躍する芸人を数多く輩出してきたことは自明の事実である。この関西ならではの特色は大きな長所となる。ユーモアはコストがかからない資源であり、かつ世界に通用する普遍性もあるため地方創生の大きな鍵になりうる潜在性を占めている。

このユーモアのセンスを存分に発揮する機会をソーシャルで生み出すことが肝要である。大前提として各事業体が独自の発信手段を持つ必要がある。Facebook やツイッターなど、SNS をと通した広報戦略を導入することで世界とつながることも可能になる。私自身も、フィンランド発祥で学生主体のスタートアップイベント SLUSH のアジア版において SNS での広報を担う PR チームリーダーとして活動した際に、ソーシャルの可能性を強く実感した。一瞬にして情報が拡散し、地理的障壁に関係なく情報がこだましあう姿は現代の IT 社会の縮図であるように感じた。

このように、関西ならではのユーモアのセンスを生かした発信をソーシャル領域で行うことで、関西から世界への流れを生み出すことができる。

以上のように、三つのコラボを実行することで関西ならではの地方創生が可能となる。私個人としても、現在は大阪で SLUSH を超えるイベントを開催するために「大阪イノベーション会議」を創設した。来年 2 月に開催の世界的ビジネスイベント Hack Osaka の学生版を実施し、関西から世界への新たな流れを生み出すために活動している。自らも地方創生の担い手として、今後も尽力してゆきたい。